社会福祉学の知識
—社会資源論のメタ・クリティーク—

丸岡　利則[1]

(2013年９月30日受付，2013年12月18日受理)

The knowledge of social welfare science
— Meta-critique of social resources theory —

Toshinori MARUOKA[1]

(Received: September 30. 2013, Accepted: December 18. 2013)

要　旨

社会福祉学の知識は，社会福祉の諸々の事態についての客観的な説明体系である。そして，社会福祉学の役割は，いつでも必要に応じて利用できる認識の体系を形成することである。同時に，学問は，この知識を獲得するための諸条件についての知識も探求する。しかし，この場合の知識の内容は，既成の社会福祉のサービスや社会保障，福祉政策などについての法律や制度の体系についての説明ではない。

本稿の目的は，社会福祉学の知識から社会福祉の全体像を体系的に捉えることができる根拠を示すことである。そして，社会資源論を通して既成の知識体系を再構成し，社会福祉学の固有の知識を示すことである。

キーワード：知識，社会資源，社会福祉学，理論福祉学，メタ・クリティーク

Abstract

Knowledge of social welfare science is an explanatory system objective about the situation of various social welfare. The role of social welfare science is to form a system of recognition available at any time needed. At the same time, the study will explore also knowledge of the terms and conditions in order to acquire this knowledge. However, the contents of the knowledge of this case is not a description of the system of laws and institutions and social security services, information, such as how welfare policy of social welfare of off-the-shelf.

The purpose of this paper is to show the rationale that can be captured in a systematic manner the overall picture of social welfare from the knowledge of social welfare science. And, it is to reconfigure the existing body of knowledge through social resources theory, and show the original knowledge of social welfare science.

Key Word: Knowledge, Social resources, Social welfare science, Theory welfare science, Meta-critique

---

1　高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・教授・修士（社会福祉学）
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Professor (M.A.)

1．はじめに

社会福祉学の知識とは何か．それは，社会福祉の諸々の事態についての客観的な説明体系である．そして，社会福祉学の役割は，いつでも必要に応じて利用できる認識の体系を形成することにある．同時に学問は，知識を獲得するための諸条件についての知識を探求する役割も持っている．

したがって学問とは，一定の理論に基づいて体系化された知識と方法である．知識は，それ自体ではダイナミズムを持たない単なる情報である．その知識を分析，考察，取捨選択，比較するものが知的技術である（斉藤2013：108-111）．その技術によって知識は，関連づけられている．つまり知識の体系は，「社会福祉学とは何か」という学問的根拠を求めることと同じなのである．

さて本稿のテーマである社会福祉の知識とは，社会福祉の諸々の事態である社会福祉サービスや社会保障，福祉政策などについての法律や制度の説明体系を意味するものなのだろうか．あるいはソーシャルワークの基底としての知識・技術・価値のなかにある知識なのだろうか．

この問いに答えるのが本稿の目的であるが，それは，既成の知識体系を再構成し，社会福祉学の独自の知識を構想するものである．そして，それは，社会福祉学を進展させ，新しい成果に導く「新しい知識」を作り出し，誰もが覚えられる知識，語られる知識，そしてもっと知りたい知識を議論することである（三谷2013：3）．

2．学問体系としての社会福祉の知識

（1）知識の見取図

社会福祉の現実の活動に対する経験は，多くの問いをもたらす．そして，それに答えるのが社会福祉学の知識であり，まさに社会福祉学とは，この知識を形成する営みなのである．社会福祉学を学ぶとは，この知識を獲得し，使用できるように定着させることである（船曳1993：37）．

たとえば絶学無憂とは，知識というものをパラドクサルに説いたものだが，それは，社会福祉学という学問にぴったりとあてはまるものだろうか．

例えば，人文科学の知識では，「知識はかつてない頽廃に陥っています．僧房を思わせる研究室の薄暗がりのなかで醸成され，隠蔽される知識．ひとえに現実的効用という目的にのみ奉仕する知識．あるいは，てぎわよく無害に調理され，カタログふうに羅列される啓蒙的知識．およそ，知識と名のつくほとんどすべてのものが，こうした制度的格子に応じて秩序づけられ，鈍重な足どりで生産・分配・消費の回路をめぐっているというのが現状です．」という指摘がある（浅田・伊藤・四方田1984：22）．このような知識と社会福祉学のそれとでは，学際的にみてどこに「共約可能性」があるのだろうか．

ここで学問における知識の見取図を鳥瞰しながら，社会福祉学の知識を再確認してみよう．知識は，その領域ごとに異なる同義の理論体系があり，それをディシプリン（academic discipline）という場合もあり，明確にそれを根拠づける定義はない．一番混同されているのは，認識と同義にされることである．知識とは，認識と不可分であること，知識は主に認識によって得られた成果を意味すること，認識は成果のみならず，対象を把握するに至る作用を含む概念である（Roderick M. Chisholm1966＝1970：2-3）．

そのほかには，知識の特徴として記録を体系化した集積，集成という属性がある．これは，時代のコレクション（書物，絵画，標本，彫像など）のイデアとして，ひとつの世界観をあらわしており，知の秩序の原型となっている（桂1996：3-6）．

また知識には，アリストテレス以来の学問的知識の分類方法がある．これは，宣言的知識，手続き的知識，形式知と暗黙知，アプリオリな知識，アポステリオリな知識，理論的な知識と実践的知識として社会福祉学にも登場する（岡村1957：4）．

以上のような知識をめぐる見取図から，とりわけ社会福祉学が学問として確立するうえで，密接に関連するものは，次に示すイデオロギーに関す

る知識であると言えるだろう．

その１つは，M・フーコーが示した「力／知識」という社会的制度に関する系譜学的分析である．フーコーは，知識や思想の歴史が虚妄であり，知識が知識を生産するのではなく，秩序や制度の歴史的現実が知識を生み出し，この由来や系譜を分析することこそ，「知」を扱う学問の課題であることを示した（今村1993：86-87）[1]．

２つには，M・ウェーバーの脱イデオロギーとしての客観性への志向である．「経験科学（の知識）は，何人にも何をなすべきかを教えることはできず，ただ彼が何をなし得るかを教えることができるに過ぎない」（M・Weber1936:14-18）という知識の客観性への指摘は，これもまた社会福祉学に影響を与えている．

さて，以上のように，社会福祉学の知識は，イデオロギーをめぐる学問としての成立条件を検討するものであるが，そのために，さしあたって「社会資源論」[2]というテーマを足掛かりにするものである．そして，この命題は，社会資源論が社会福祉学の知識足りえるのかという問いに答えることであり，これを解明する手法は，メタ・クリティークの「概念装置」[3]を用いる．この装置は，とりもなおさず概念の「意味」を読み解くことから始まる．その使命は，社会福祉の視点と文脈を変換して，概念経路と概念地図を示すことにある．そして，その意味は，社会資源論から切り開く社会福祉の原理のエッセンス[4]である．

（２）知識の認識について

社会福祉学の知識は，社会福祉の原理の説明体系ではない．しかし本稿では，社会資源論の総論を検討するためほぼ同義に用いる．

さて，まず知識の全体像について検討するためには，現実にある社会福祉の諸々の事態そのものの説明ではないという認識が必要であるだろう．学問と現実の間には，認識上の差異があることを踏まえなければならない．

認識上の差異については，M・シェーラーが知識を三分法で説明している（Max Secheler1931：129）．それは，「教養知」，「有用知」，「救済知（救拯知）」という３つの区別である．「教養知」は，受動的で対象から距離を置くことであり，観察，認識が中心となり，副次的，二次的な役割を果たすものである．科学的認識そのものを目標として価値評価をしない言わば科学的学問体系を意味する．「有用知」は，反対に，実践知であり，先の科学とは違い，実際にすぐに役立ち，相手に手段を下す技術のことである．手段の発明と操作に主眼があり，現実的処理の分野のことで，広大な実践領域を意味する．最後の「救済知（救拯知）」とは，究極の問いに答える世界観又はイデオロギーであり，宗教・哲学が担っている分野のことである．価値作成を目標とし，行動の規範や社会原理，世界観や価値体系を領域とするもので評価的な関心が優位に立つものである（山本1956：173－193）．

したがって，３つの知識は，それぞれの共通部分が一部重なって成立する．社会福祉は，現実それ自体をそのまま有用知として思考の対象としていることがある．しかし，ここでの議論は，現実ということの意味は保留されている．世界が概念であるということや「あるがままの現実」の存在の客観性の認識ということなどへの議論は含まれていない．

次に，以上の前提を踏まえて，知識としてのキーワードである社会資源とは，例えば「福祉ニーズを充足するための活用される施設・機関，個人・集団，資金，法律，知識，技能等々の総称」（社会福祉用語辞典2002：214）と示されているように「辞書」による端的な説明がある．これは，現実の社会福祉の事態を概念化したものであり，社会福祉の現実を観察したことや現場の活動から組み立てられている．しかし，これは，はたして社会福祉の知識足り得るのだろうか．

現実の問題とか対象は，ある意味では，すでに確立された知識体系と言えるものではあるけれども，それは，いつでも非常に複雑なかたちである．

社会福祉の現実をそのまま思考の対象として考えても確かな知識を得ることにならないのである．

すなわち知識は，現実の複雑な問題や対象を「知るに最も単純で，最も容易である」部分に分解しなければならない．そして，それは，「現実の複雑な問題あるいは対象の模型を概念的に構成し，それについての説明的仮説の体系」を構想しなければならないのである（船曳1993：74）．

そして学問としての知識は，アブダクションという推論から構想される．アブダクションの重要な点は，従来の知識の言い換えではなく，知識を新しく作っていくことにある（吉川1996：222）．理論的なものと現実的なものの峻別をするときに，学問としての知識の内容が問われているのである．それは，学問のあり方や方向性への交通整理である．

学問のあり方とは，社会福祉学の学問の生成に関わる理論的な根拠となるものである．社会福祉学を理論化し，体系的な「理論福祉学」を構築するための展望が含まれている．

社会福祉学の知識の内容を決定づける整理には，いくつかの原理的な分岐点が現れる．それは，観念論と実在論（唯物論）のように学問的構想の土台を峻別する立場の相違，社会福祉の活動の規定（「具体的な人間個人の生活を対象として，それをよりよいものにする活動」），「生活」という概念がもっている規則性や構造と過程の解明，そして，特に価値やイデオロギーをめぐる知識には，社会福祉学自体が経験科学か規範科学かという両義性の問題も含まれる．

とりわけ経験科学と規範科学の争点は，社会学では「一般理論そのものが純粋な経験主義を超えて，規範的な理念を語るために展開されたのである」（盛山2006：35）．社会福祉で言うと，例えば「人間性の可能性を信じて個人に働きかけつつ，社会の不正や不公正を糺すという理念に基づいて，ソーシャルワークは，隣接領域からさまざまな理論を借用することによって援助活動の対象の全体像を理解しようとしてきた」（杉野2011：98）というように，実践理論史を見る限りでは，理念というイデオロギーについての知識の両義性についての基本的性格の検討が必要であるだろう．

この両義性は，社会福祉学の意味を解く核心になるだろう．それは，現実的に社会福祉の理念を扱う場面で遭遇する事態である．まさに「有用知」と「救済知（救拯知）」が混合する場面がそれである．そして，それは，「明らかに，社会的事実とは，権利，義務，役割，責任，規範，手続，資格，価値あるいは，理念や信仰によって構成されているものであり，本来的に『規範的』なのだ．この規範性（理念性といってもいいが）を前提にすると，社会的事実の『客観的認識』はますます難しくなる」のである（盛山2006：43）．

この根本問題は，客観的な認識の可能性への探求であるが，またそれと対概念になっている問題は，観念論と実在論という構想上の立場のことではなく，例えば冒頭で述べたM・フーコーに代表されるようなポストモダンを，社会福祉学がどのように取り扱うのかにかかっている．

以上のような知識をめぐる問題は，社会福祉学が学問として抱えているものと同じである．そのため，議論をメタ・クリティークの批判的な観点へ差し戻して考えたい．つまり，社会資源という知識を切り開く道筋は，見取図で見てきたように，現実との乖離をうずめていく方向とイデオロギーの受け止め方を探る方向にあるだろう．

そして，議論の核心は，まさに社会資源の知識が社会福祉の原理足り得るのかということである．そして，現実と理論との乖離を埋めるために，社会資源を通して，社会福祉学にとってあるべき知識，すなわち，「誰もが覚えられる知識，語られる知識，そしてもっと知りたい知識」を問うものである．したがって，知識の本質へのアプローチは，社会資源論が社会福祉の原理とぶつかる事態[5]から解き明かしていくことになる．

3．社会福祉学の原理と社会資源

（1）社会福祉の原理と知識

それでは，知識としての社会資源が社会福祉の原理とぶつかる事態のいくつかを取り出してみよう．

ところで社会福祉の原理とは，社会福祉学の学問的根拠であり，それは，社会福祉という概念の意味を明らかにしたものである．意味とは，社会福祉の世界にある人間と社会の関係を比喩ではなく，その本質を原理で示すことである．社会福祉における社会や人間を認識するときに，いったい何が認識されなければならないのかを明示的に設定することである．まさに「現実に社会福祉，あるいは社会福祉事業ということばで呼ばれているものを捉える方法そのもの」である認識方法を構築することである（船曳1979：84）．

しかし，「原理とぶつかる」ということは，学問それ自体が固有の視点と文脈を内包しているという条件がさらされる局面のことである．すなわち社会福祉学の学問体系を構成する条件をクリアーしなければならないことなのである．それが学問の条件であり，知識の条件なのである．

それでは，最初に遭遇する地点が社会福祉の全体像を説明した理論的根拠をめぐる接点にあることを見てみよう．

例えば，古川は，「社会福祉」を次のように概念規定している．「具体的な内容をなすものは，市民の社会生活上のニーズを充足あるいは軽減緩和し，最低生活水準の確保，自立生活能力の育成，日常的自立生活の維持・援護を図ること，またそのために必要とされる社会資源の開発・調整ならびに利用の促進を図ることをめざして，各種の機関，施設，そして地域社会において展開される専門的な援助活動ならびに社会活動の総体である」（古川2011：14）．まさに，ここが社会資源が原理とぶつかる地点なのである．

ここでは，社会資源が社会福祉の根幹として捉えられている．社会福祉は，社会資源を開発し，調整し，その利用を促進することであるとされている．さらに原理的な観点として，このとき「モノ，カネ，ヒト，情報」を「社会福祉を構成するもっとも基本的な要素」であるとしていることである（古川2011：8）．同じように，この構成要素は，「人，もの，金，とき，知らせ」（市川1997：159）という社会資源の例示と一致している．

しかし，この一致が社会福祉の学問的知識の説明原理として成立しているということが検証できたわけではない．

（2）社会福祉の知識群

社会福祉の知識として社会資源以外で前提とされているものは，大きく2つあるだろう．

1つは，「社会福祉」（Social Welfare）の概念に関する知識のことである．Social workers as deliverers of social services（ソーシャル・サービスを配達するソーシャル・ワーカー）という場合のソーシャル・サービスとソーシャル・ワークのことである（B. R.Compton1980：103）．

特に，ソーシャル・サービスの知識は，次のような体系となっている（Sheila B.Kamerman & Alfred J.Kahn　1976：3）．

1．所得維持　(Income maintenance)
2．保健医療　(Health care)
3．住居　(Housing)
4．教育　(Education)
5．雇用　(Manpower)
6．パーソナル・ソーシャル・サービス
　(personal social services)

米国で，通常「ヒューマン・サービス」(Human Service) として呼称されているものは，英国では，「ソーシャル・サービス」(Social Service) と言われているが，このヒューマン・サービスは，「社会保障，社会的公正，社会的機会の理想的な目標」を扱い，「個々人の福祉に重要であるばかりでなく，安全な市民と安定した社会の維持にも重要である」とする普遍的なサービスであり，基本的な6つの分野（パーソナル・ソーシャル・サービスを含めずに伝統的な5つの分野のみを，その領域

とする分類をすることもある）を包括するものである（Compton1980：63-64）．例えば，Compton は，上記の６つのうち，（１）所得維持，（２）保健医療，（３）住居，（４）教育，（５）雇用，（６）職業的リハビリテーションを「ヒューマン・サービス（Human Service）」として分類している（Compton1980：62）．以上が大分類の「社会福祉」（Social Welfare）についての構成要素である．

２つは，社会福祉学のなかでもソーシャルワーク実践に関する知識で，すでに19世紀から積み重ねられてきたものである．

ソーシャルワーク論のなかでの知識は，H・バートレットなどが実践的なものを根拠づけるために「３つの要素」として概念化されたものがある．それが，知識（knowledge），価値（values），調整活動レパートリー（Interventive Repertoire）である（Bartlett1970:82）．

この３つの要素は，その知識の骨格をなすもので，全体像を端的に示していると言える．この３つの要素について，平岡は，前節でのシェーラーの「教養知」，「有用知」，「救済知（救拯知）」の学問全体の区分ではなく，ソーシャルワークの枠組みだけで，「知識」を「理論知」，「価値」を「理念知」，「調整活動」を「実践知」と区分している（杉野・平岡他2011：82）．彼は，その区分から知識を次のように説明している．「ソーシャルワークの理念知は，ソーシャルワークの目標を規定し，理論知は対象領域の枠組みを提供しているといえる．そして，実践知は，実践上の心構えといったものから，面接技法のような具体的な方法まで，まさしく実践にすぐに役立つ知識から成り立っている」（杉野・平岡他2011：98-99）．

以上のようにソーシャルワーク論は，知識の前提を説明している．それは，知識が実践に役立つことであり，それが関連する専門職や学問分野から，実践に適切なものを引き出すことであり，それが「知識と理論」であるとしている．とりわけ知識には，２つのタイプがある．それは，１つは，さきほどの行動科学系の精神医学と心理学や社会科学系の学問を示し，もう１つは，「実践の知識（実践にうずもれている知識）」であるという（Bartlett1970＝1978：117）．

バートレットが知識を Body of knowledge として示したのは，この２つタイプの統合のことである．また，そこでは，知識の統合への道筋を「社会生活機能」（social functioning）という観点から捉えること，それをソーシャル・ワークという枠組でまとめることだと述べている（Bartlett1970＝1978：119）．

このように社会福祉学の知識を考察する上で，社会福祉におけるソーシャルワーク論の中心的な論点であるところの「生活問題の解決」は，伝統的に次の２つの方法でなされてきたことを踏まえなければならないだろう．その１つが「社会生活機能」（現在では，social functioning は，「社会的機能」と訳されている）としてあらわされているものである．つまり，それは，社会福祉を「人間個人が社会的役割を実行するのを援助する活動」である．あとの１つは，「人間個人が社会的資源を受用するのを援助する活動」である（船曳1993：112-113）．

４．学問としての社会資源

（１）社会資源のコレクション

学問としての知識は，生成条件を持っている．それは，コレクションと呼ばれ，その学問領域が扱う対象を限定するものとなる．それによって対象領域が定まるのである（吉川1996：214）．

この節では，対象領域に関して，社会資源をとおして，社会福祉学としての学問生成の条件を探ってみよう．

社会資源の典型例として，先に「人，もの，金，とき，知らせ」を挙げたが，これは，果たしてコレクションとして「認められうるすべての対象をとりあえず羅列したもの」であろうか（吉川1996：215）．しかし，社会資源の全対象を整合的に網羅し，説明し尽くすことなどということ自体が無謀でもある．ここでは，社会資源がどのように分

類されたのかをコレクションの視点である対象限定から見てみよう．

定義としては，「一般的には，社会システムを維持し，存続し，発展させるために個人や集団の欲求を充足するのに必要な資源のことであるが，特に社会福祉資源という場合には，福祉ニーズの充足のために利用・動員される施設・設備，資金・物品，諸制度，技能，知識，人・集団などの有形，無形のハードウェアおよびソフトウェアを総称している」が挙げられる（小笠原2004：164）．

しかし，これは，「有形，無形」という抽象以外には何も限定されていない羅列であり，それを選び出した基準が示されていない．そして，これらの一般的定義の共通点は，何を置いても，「福祉ニーズ」に対応して，社会資源を「活用する」ことである．つまり，福祉ニーズが「対象」となり，それについての解決方法が「社会資源の活用」となるのである．

それに付け加えれば，これらの膨大な「利用・動員」される施設・設備，資金・物品，諸制度，技能，知識，人・集団などの有形，無形のハードウェアおよびソフトウェアの総称としての「知識」は，ほぼ社会福祉のテキスト群の知識内容と一致しているだろう．この説明のコンテクストは，社会資源を「整備・維持」や「把握」「予測」そして，「変容」させていくことが課題となっている（小笠原1993：164）．

一方，ソーシャルワークの古典として，社会資源の「活用」を「間接的方法」として初めて示したM・リッチモンドは，社会保障サービス以外で，「家族，友人・知人，近隣の人，ボランティアなど」を挙げている．この特徴は，ケースワークを通して，社会資源の重要性を特に人的資源においていることが理解される（M・Richmond 1991：57-59）．この分類は，社会福祉学のなかでソーシャルワークに関する社会資源の内容を説明した最初の知見である．

前節で社会福祉には，「社会的資源の受用」と「社会的役割の実行」と2つの援助活動があることを見てきたが，リッチモンドは，この両者の統合を説明したものである．しかし，人的資源と他の社会保障サービスの関連と文脈は示してはいない．

また社会福祉学会での通説[6]となっているところのサイポリンは，内部資源と外部資源に区別している（Max Siporin1975:22-25）．これは，批判的に言うと，フォーマルやインフォーマルの区別など多くの地域福祉論や社会資源論で引用されているが，そのカテゴライズは，シンボリックな資源と普遍的な資源に区別してはいるが，抽象のレベルが一定していない（船曳1993：116-117）．

以上のように社会資源のコレクションについて，それを分類し，整理し，特徴づけられたものを見てみると，それらは，その要素が選ばれた規則性や基準，その過程などが不明であり，断片的に配列されたもので，部分としての要素の概念が不在であり，それを関連づけた全体の構成要素が不明であることが指摘できるだろう．

（2）社会資源の限定

コレクションが開始されたとして，対象である社会資源の限定は，どのようにして可能だろうか．それは，選んだ対象集合の要素間の関係から，単純な基本原則を導出することである（吉川1996：214）．何を根拠にして観点を定めて，コレクションを作ったのかということである．その分け方の根拠や必然性が求められる．

社会資源の分類は，その文脈を離れて，断片的に列挙したものが多い．これまでには，社会資源の特徴を決めるために抽象の過程があきらかにされていないこと，供給主体などとの関連づけが不明で一定していないこと，それぞれの性格が一致しないこと，つまり，構成要素がないこと，その範囲，連関，根拠を明確にしてないことが指摘できる．

分類には，構成要素が必要である．それが何と何の要素で構成されているのかという根拠が重要である．そこでは，社会資源を構成するカテゴライズの文脈が示されていなければならない．そし

てこの分類方法から文脈へのステージが明確に示されなければならない．

社会資源の基本のような説明は，「社会的ニーズを充足や問題解決のために活用される多様な資源の総称」(高橋・山縣2005) が端的であるが，「多様な総称」では意味がつかめない．

また一般的には，保健・医療・社会福祉その他あらゆる制度や施策，サービス，人材･施設･資金･アイディア等，フォーマル，インフォーマルな社会資源を調整したり結び付けたりしながら，社会資源を最大限に活用しなければならないものとして総動員されるような意味の説明がある（岩間2009：232)．

しかし，このような言い換えのバリエーションは，資源を活用することだけに終始する．常に，この「結び付け」と「調整」だけの言い換えのバリエーションなので，これまでの「人，もの，金，とき，知らせ」(市川1997：159) のうち，「とき (時間やチャンス)，知らせ（資源情報)」は，供給主体だけの指標では説明ができない．ここでも，単純で断片化された社会資源が見えるだけである．

白澤は，分類の基準として「３つの軸」(内容と範囲）を決めている．それは，「対象者のニーズに対応したもの」「誰が提供するのかという視点」「質」というものである（白澤1993：112)．さらに，「三つの指標」という基準を再設定して，「供給主体」「利用者側の生活上のニーズ」「質的内容」と言い換えているが，ほぼ同じ内容である（白澤2007：433-435)．しかし，この３つの上位概念が規定されてはいないこと，またその３つの関連から全体像を説明するものもないことが指摘できる．

また，徳永は，社会資源の「特質」を白澤の基準をもとに次のように再構成している．それは，「ニーズによる対応するもの」「誰が提供するのかという視点」「質による分類で，物質的資源と人的資源」という区別である (徳永1999：94-95)．

さらに，坂口は，「社会資源の整備」として「整備（創設・確保，改善，解消，維持)」「整備主体（行政組織，議会，民間の社会福祉実践機関，ソーシャルワーカー，住民，オンブズマンなど)」「社会資源の種類（金銭，人材，物，時間，情報，関係，制度など)」を挙げている（坂口1998：199-200)．

以上のように，前節でも見てきたように，有形無形，不可触，不可視の分類を統合する上位概念が取り出されていない．結局，社会資源を規定している共通の上位概念は規定されず，ニーズに関連づけられた「対概念」をできるだけ網羅的に取り出すことであり，社会資源の公式が「人々の社会生活上のニーズに対応して，それを充足するものとして社会資源を活用すること」という規定なのである．通説であるニーズこそが社会資源を解き明かす唯一の手がかりなのである．ニーズに対する社会福祉の解決の方法が社会資源の活用であるという枠組みから抜け出せてはいないのである．

ニーズ概念では，これまでの分類のなかにある「とき，しらせ」や「情報」や「知識」を一貫して説明できないことが挙げられる．この概念からでは，知識を活用し，それを提供するという意味が取り出せないのである．さらに，社会資源を複合的に捉えた分類項目が見いだせないのである．さらに付け加えると，例えば愛情や知識，そしてエンパワーメント[7] などの関係的な資源が社会資源であることの文脈が認識できないことも指摘できるだろう．

白澤は，供給主体とニーズという２つの指標を配置し，それに「質的」を組み合わせて構造的に理解できるとしている．質的という分類方法のなかで，社会資源を「物的資源」と「人的資源」に分けて，「物的資源には，金銭や物資，施設や設備，制度などが含まれる．人的資源には，知識が技能，愛情や善意，情報や地位を内包している」という（白澤1993：119)．しかし，構造化した図式だけでは，いつまでたっても知識や愛情をどのよう「活用する」のかが不明なのである．

例えば「人，もの，金，とき，知らせ」が構成

されている場合に，特に「とき」とは，「就業時間，ボランティアが活動する時間．課題を共有化して，合意して取り組むチャンス」であり，「知らせ」は，「上記の資源情報，サービス利用者情報，相談窓口における情報等のニーズ情報，計画策定に必要な統計などの管理情報」としている（市川1997：159）．しかし，「とき」を要素としているが，例えば「とき」である「就業時間」という資源をどのように「活用」するのかが不明である．

5．ニーズ論とメタ・クリティーク

（1）ニーズ論を超えて

学問の生成は，コレクションから次のステップである法則の導出であるとされる．コレクションから抽出されるものとは，「必要で十分な基本原理，すなわち法則」が導出されなければならないのである．その法則の導出が「仮説形成」となる．別名，この推論がアブダクションと呼ばれているものである（吉川1996：217）．

さて社会資源論は，ニーズを充足するために用いられるものとされている．しかし，それだけで「とき，知らせ」などの要素が社会資源論として構成できるのだろうか．

それでは，社会資源の理論的な根拠の内実をメタ・クリティークの視点から再構成してみよう．特に，理論の組み立て方や枠組みについての固有性や体系的な構想をより具体的に検討してみよう．

まず社会資源には，「予備概念」の知識が欠如していることがあげられる．理論形成には，観察に先立って，あらかじめ予備概念の知識体系の構築が必要である．

社会資源を予備概念で見るとき，それは，人間生活に対して，これは，どのような活動から成立して，それらがどのように関連しているのかという「構造」と「過程」を概念的に構成しなければならない（船曳1993：48）．

この予備概念からすれば，「人の生活困難を人が生活の営み手として行う対処の困難」と置くと，その解決活動は，「社会資源」との関係ではなく，社会環境がもつ自分の生活を阻害する諸条件と，人がどういう関係を営むかが主題になるはずであろう．そして，それが社会資源を構成する理論の中心となるものであるだろう．

ニーズや欲求の区分を予備概念として段階的に説明した推論が「段階説」である．段階説は，社会資源という「存在」が「人間の行動に対して現す『様相』によって」を「段階ごと」に「区別」されることを示している（船曳1993：116-117）．

社会資源論は，以下の4つの段階ごとに区分されている．富永は，社会学における社会資源をつぎのように説明する（富永1965：250-252）．

1．物的資源あるいは物財
2．人的サービス資源
3．関係的資源あるいは関係財
　（報酬としての）社会的威力または威信
　（用具としての）社会的勢力または権力
4．文化的資源

また，船曳は，富永を参考にして，次をカテゴライズした（船曳1993：116-117）．

1．財・貨幣
2．サービス，労役
3．関係的資源（威信，友愛あるいは親和，権力）
4．知識・情報

ここで重要なのは，段階ごとの区分の意味である．社会資源の活用をすることが社会福祉の生活困難の解決方法であるとするならば，社会福祉は「社会資源の種類（あるいは段階）ごと」に応じて，「財の受用を援助する社会福祉，サービスの受用を援助する社会福祉，関係的資源の受用を援助する社会福祉のように，それぞれの種類の受用を援助する社会福祉として構成される」ことになると批判している（船曳1993：125）．

（2）段階説へのメタ・クリティーク

社会資源論の知識は，今も実践的にも，流布している社会福祉の中心になっているものである．段階説は，現実としての社会資源とは切り離され

た概念で抽象度が高いので，恣意的な術語になる可能性が高いかもしれない．それをまた，さらにオルタナティブな文脈のなかに転換してみよう．

社会資源は，社会福祉学が持っている知識に共通するメカニズムが存在する．それは，「対欲求」という概念であった．これを解明することによって，社会資源論を超えて，社会福祉学の共通項目が取り出せるだろう．

それでは，ここでメタ・クリティークからオルタナティブの社会資源論を読み解きながら再構成してみよう．それは，以下のように船曳の４つの最後に５段階目の項目を追加したものである．

1．財・貨幣
2．サービス，労役
3．関係的資源（威信，友愛あるいは親和，権力）
4．知識・情報
5．永遠の生命

これは，社会資源のニーズ論から読み替えた言わば「新段階説」である．ここには，対欲求のメカニズムが予定調和として示されていることが読み取れるだろう．

社会資源論には，ニーズや欲求の種類（あるいは段階）に対応して，それごとに受用される区別された項目がある．つまり，欲求の対概念＝「対欲求」としてのストーリーが存在するのである．

つまり，この段階説は，それぞれの欲求の区分に対応して，社会福祉の提供される項目（規則が一定せずに，種類に応じて提供するものが自在に変化する）が存在する．しかし，このことは，社会福祉概念と実は同じ符号（意味）を持っている．それは，社会福祉という概念を「日常生活のその都度の諸関連の中に位置づけ，そこで現れる諸特徴を纏め取って構成されたもの」としているからである（船曳1993：20）．ここでの「諸関連」の符号とは，５段階がそれぞれ段階ごとに別々に文脈を持っていることなのである．

以上，人間の欲求の構図を見てきたが，この段階説は，人間の欲求の「ステージ」を延々と拡大する「無限性」を社会福祉の対象にして，次々にサービスを展開することが予測できるだろう．そして，最後には，現代社会福祉は，永遠の生命，不死というような最後の援助をどのように結びつけるのかということになるのである．

この段階説から見えるのは，１つは，対欲求ということを軸に，主体と客体の対比が明示的であることである．

２つは，社会資源の代表的なものと段階説とが別次元に置かれて，小笠原が示したものには，「施設・設備，資金・物品，諸制度，技能，知識，人・集団などの有形，無形のハードウェアおよびソフトウェアを総称」（小笠原2004：164）というように，関係的な資源や知識・情報を視野から外してしまっていることが挙げられる．

３つは，段階説という分類の整理が社会資源の性格や特徴を考察する契機となっていることである．つまり，要素の「軸」や「基準」という概念を構成しなければ，段階ごとに「資源を活用する」ということだけでは意味に結びつかないからである．まさに，このときに社会福祉で流通している「サービス」という概念の再検討が開始されるだろう．

４つは，ニーズ（「欲求」と同義に用いる．）概念からでは，結びつけ方が解けなかった知識と愛情や関係的資源の活用をすべて「サービス提供」という点に置き換えて，複合的に捉えたことである．しかし，これはレトリックの域を超えていない．一見辻褄が合うように見えるが，言葉の正しい用語法では，社会資源に結びつけることが社会福祉だという原理の根幹は，ここからは解けない．むしろ，永遠の生命というようなサービス提供に至る道筋から見て，この時点ですでに社会資源論自体がすでに，社会福祉の知識としては，破綻していることが理解できるだろう．

6．メタ・クリティーク

（1）社会福祉の視点

社会資源論へのメタ・クリティークは，社会福祉学の学問（知識）をめぐる地点への批判から開

始される．その地点は，学問としての生成の根拠と結びついている．

ここでは，冒頭での学問の見取図への問いに対して，より社会福祉学の確立に近づけるような方法で答えたい．それは，社会福祉学の学問の生成に関わる理論的な根拠となるものへの解明に向かうものである．

まず，知識としての「固有性」に対する批判から見てみよう．ここでは，とりわけ社会資源論から取り出した社会福祉学の固有性のありかについてメタ・クリティークから検討してみよう．

社会資源から見てきたように，社会福祉学の知識は，多義性に特徴があった．社会福祉の用語集や辞典のような断片的な知識であるとしても，あらかじめ文脈が喪失されたものであるというような特権を有するものではない．社会福祉に限らず，すぐれた専門分野におけるキーワードの意味内容は，自らのその知識（概念）の課題のかたちと，その方法が果たす意味を自覚している．

しかし，社会資源のようなキーワードが断片化している状況は，隣接領域の他の学問と比べてみると，社会福祉で同じキーワードを使用しながら，他の分野のそれと意味が違うことがたびたびあることを「相互関係」問題として指摘してきたところである（丸岡2013：37）．

このようにキーワードが持っている多義性や横断性は，社会資源の活用が「人間行動一般としてしか理解されていない」（福祉ではなく，人間の生活手段などの経済的な行為全般）ものとして捉えられることにつながる．したがって，そのとき，社会福祉は「それを変容させる活動」に過ぎなくなる（船曳1993：173）．このとき社会資源は，社会福祉学の固有の知識ではなく，単なる経済用語にすぎない．

問題の焦点は，固有性を喪失した社会福祉学が必然的に理論的形成への無関心につながることにある．つまり，何度も繰り返してきたが，社会福祉の現実の複雑な問題または対象の模型を概念的に構成し，それについての説明的仮説の体系の形成への無関心につながっていることなのである．

社会福祉学の固有性を追求した岡村理論は，現実の社会福祉の活動を捉える視点と文脈を徹底的に問い詰めた．援助対象と援助内容を「社会関係の不調和，欠損，社会制度の欠陥」（岡村1983：107-113）であるとした．まさに固有性の焦点とは，社会福祉の対象と解決方法の内容を規定することである．そして，そのためには，視点と文脈を明らかにしなければならない．

社会資源論には，視点が定まっていないことが指摘できるだろう．それは，段階説でのなかでも見て来たように，視点の置かれている主体が変容することである．それは，「主体」の所在が一定していないので，もっぱら視点が定まらないことからきている．

社会資源を供給する主体から分類すると，（1）家族，親戚，友人，同僚，近隣，ボランティアなどのインフォーマル・セクターによるもの，（2）および行政，法人などのフォーマル・セクターによるものとに分けることができる（高橋・山縣2005）．白澤は，供給主体が誰なのかということから分類する方法を1つの指標としている（白澤2007：433）．また，所も供給主体について，「これらをどう組み合わせるのか，どの供給主体が主要な役割を果たすのかといった点について議論が必要」としている（所2007：331）．これが混乱の元となる．

主体の所在が一定ではないことは，例えば供給主体であり，サービス主体であり，多くは，「資源の配分」（allocation）のように，政策選択の重要な性格を決定する要因となっているものである．要するに，社会資源を「多元化」した構造で見ていることになる．そもそも「だれがだれのためにこの資源を配分しているのか，ということは大変分かりにくくなりつつある」というように，主体の所在は，福祉サービス論の根幹にもかかわらず不明であることのほうが多い（高澤2000：95）．

また，視点は，同時に現実と理論の乖離にも言

えることである．現実での社会資源を扱う経験的な概念は，常に変容するものである．

社会資源から原理へ向かう道筋は，この視点の根拠となるものである．社会資源にせよ社会福祉の原理にせよ，視点が固有性を位置づけるのである．

特に，現実における視点は，総合的な判断であるとか，包括的な対応とか，あらゆる角度から検討するなどという用語で表現されるように，非科学的に目まぐるしく変貌するものである．

ここで言う視点とは，わざわざ知識を見るためにかけるメガネのことである．つまり社会福祉の諸々の現実に対して，何と関連づけて見るのかにかかっている．これが学問の生成の条件の出発点である．

まず視点を定め，そこから「全体像」（知識の体系）を前もって決めておくことになるだろう．そして，その全体像には，社会福祉は何と何でできているという構成要素が必要である．そして，その全体像は，分節化され，組織化されなければならない．それが，理論の法則である概念経路という分析方法であり，最後には概念地図という知識の体系を作り出すことである．これがメタ・クリティークのストーリーである．

（2）社会福祉の文脈

視点と文脈は，メタ・クリティークの再構成の核心であるが，それは，社会福祉学のディシプリンにおける構成要素の条件となるものである．また，本稿の冒頭での学問上の知識の動向の見取図で言及したテーマであるところの現実の乖離とイデオロギーと深く相関している．

社会福祉学の固有性は，知識の本質につながる．それは，社会福祉における社会政策を捉える視点として，社会像を捉える範型のありかにあるということを踏まえなければならないだろう．範型の背景には，知識とイデオロギーとの接点が検討されなければならない．

原理との衝突について検討してきたが，とくに文脈のありかを示すことが強調されなければならない．それは，それほど容易ではない．特に，社会資源論のなかでは，範型と文脈が不在である．このような範型を描かない累積的な契機と，文脈の不在性については，すでに強調してきたとおりである（丸岡2013：38）．

さて，知識は，キーワードとしての意味を持っている．だから社会資源を構成している愛情や知識やエンパワーメントの要素間の説明が不明であることや本来文脈を離れたものは存在しないのである．問題は，これらが社会資源であるかどうかということではない．そのことよりも，それ以上に範型と文脈のありかが重要なのである．それは，社会資源の説明のなかに，それをどのようにするのかという明確な観点が示されているのかである．それがないと，社会資源の説明が成立しないのである．その典型がエンパワーメントなのである．

知識には，このような範型の根拠を明らかにしなければならない視点が必要であること，文脈の客観性に言及することが重要である．

以上のように固有性の欠如の核心の１つは，社会福祉の現実にある．現実に「社会福祉」という言葉で呼ばれているものを捉える認識方法にある．

そもそも認識方法が確立していないので，現実の知識をそのまま受け入れている事態がある．例えば，社会福祉の「対象」についての理論的な概念とは別に，社会福祉を学問するに先立って，現場で流布している「社会福祉とは，社会資源を活用することだ」という規定がそのまま知識として決められている点である．

社会資源の知識は，現実にある人間生活の活動の広がりを捉えたものである．現実には，この知識が社会福祉の全体像を捉えたようにも見える．しかし，学問は，それだけではない．現実にある社会福祉の法則を見出し，あるいは現実との差異や矛盾を整理して，社会資源の知識を非常識に転換し，総論への可能性を示さなければならない．

それでなければ，この知識は，いつまでたっても「実現すべき内容」が見えてこないだろう．

さらに，社会福祉学の知識のなかでの「対象」である「生活」や「社会」という概念については，本稿のテーマではないが，結局，この基本構想の骨格が見えないので，この関連で「生活上のニーズ」という概念が深められていない．それが社会資源論では，ニーズ（欲求）という「対概念」という枠組みが文脈を背後で形成していたのである．これは，次に議論するところであるが，社会福祉の知識の文脈をめぐる核心の不在を示しているのである．

7．知識の概念地図

（1）知識のアポリア

知識の概念地図を描くために，これまで社会資源論が原理と「ぶつかる局面」の分析から社会福祉学の知識像を求めてきた．しかし，これまでの学問の生成論をめぐる検討からさらに，次の局面は，社会福祉学という学問が持っているアポリアに「ぶつかる」ことにある．

言うまでもなく知識の全体像に至る道筋は，確実で客観的な，説得力も予測力もある知識体系でなくてはならない．同時にそれは，「個々の事実や認識を，ある原理・原則によって統一的に，だれにでも納得できるように説明し，しかも実践の指針となりうるもの」（漢語林）という説明体系としての知識を明示することなのである．

ところが，社会福祉学の本質を捉えようとするときに，必ず「ぶつかる」のは，アポリアである．そして，そのかたちは，いつでも核心の不在（コード化）という現れ方をしているのである．例えばそのいくつかは，二元論（観念論，実証主義，イデオロギー）の葛藤として現れる．そして，これらの解法への道筋こそが社会福祉学の知識の地図を書くうえで，いつでも避けられない課題になっている．

これらの課題は，言い方を換えれば，「客観性」をめぐって，現実との乖離をうずめていく方向と，「イデオロギー」についての被拘束性（立場性）の相対化のありかを探る方向である．すなわち，それは，冒頭の見取図で見てきたように，社会福祉学の学問上の条件であるところの「客観性」と「イデオロギー」のアポリアを解くことにあるだろう．

同様に社会資源論がぶつかったアポリアは，これまでの議論のなかで見てきたように，その知識は，段階説を関連づける各段階相互の意味関連が不明であることだった．要素である「愛情や知識，エンパワーメント」などの関係的資源は，単に個別のニーズ（欲求）概念と関連づけられていたが，断片的に段階ごとの相互関係を結んでいるので，それを構成する文脈や上位概念が見いだせなかった．

社会資源が知識足り得るためには「条件」が必要であるが，それは，まさに同じく社会福祉学の学問上のアポリアを解くことに他ならない．

まず，1つのアポリアである「客観性」をめぐる論点では，社会福祉学の理論的な体系化への可能性の核心となる客観性の根拠が焦点である．それは，通常，経験科学か規範科学かの両義性を総合する道筋にある（盛山2006：35）．

社会福祉学は，本来実証主義を基本としているが一方では，ノーマライゼーションというような理念を語る知識体系を持っている．しかし，それは，純粋な経験主義を超えて，規範的な理念を構成する「装置」が社会福祉学に存在しないということなのである．

それは，例えば，ロールズ（J・Rawls）が主張するような正義論やセン（A・Sen）の自由論と社会福祉との関連を説明しきれていないことである．ここでは，正義論などの細かい議論に踏み込まないが，要は，社会福祉学がこの哲学や思想を無限定に受け入れている実態があるものの，特に生活概念との関連が不明であることが指摘できるであろう．

このアポリアの焦点だけをかいつまんで言うとこれは，社会福祉学という学問の性格の根拠であ

る．つまり，「生活なる概念」を単純に，また純粋に客観科学として捉えることができないというところにある．この根本原理の両義性は，社会福祉の援助対象としての「生活なる概念」の条件を検討するときに，また社会資源を検討した時にそうであったように，それは，問いに答えないままに，その中心部分が空洞化になっていて，つねに不在なのである．

以上，規範科学の問いを「装置」の不在と，両義性の克服ということに設定し直して論じてきたが，２つには，イデオロギーの意味を問い直すことのアポリアにあるだろう．

このアポリアの例示であるエンパワーメントは，ポストモダンの枠組みのなかで，イデオロギーとの相関を持っている．この用語は非常に多義的であり，通常は援助原理として用いられているが，ここでの検討は，ソーシャルワークと社会福祉学の二元論のなかでのイデオロギーの基本を取り出すものである．

エンパワーメントは，ソーシャルワークのなかでは，関係的資源と解釈されてはいない．また，その議論を審議して，批判的な考察をするものでもない[8]．この実践理論の論点は，ソーシャルワークの「価値」と呼ばれるものを基盤にしていることなのである．これは，ニーズの充足，社会正義の促進，資源のより平等な分配などの価値としての要素が，エンパワーメントを志向する実践の基盤になるものだとしていることである（久保2000：115）[9]．

ソーシャルワークの価値と呼ばれるものは，その中に政治的な観点が持ち込まれることを意味する．また社会福祉学のキーワードとしての「生活概念」と同様に「社会」という概念も，愛情や知識，エンパワーメントなどの関係的資源と同じく，実体として捉えられるものではない．つまり「生活」や「社会」に関する知識も，社会福祉学にとっては，現実として観察できる言葉とは限らないのである．

知識としての「社会」は，ここで重大な岐路を迎える．「社会」を認識しようとすることが知識の本質であるが，当然のように社会認識の何が本質であるかに焦点がある（盛山2006：35）．

また，ポストモダンの枠組みにおけるイデオロギーは，Ｍ・フーコーに代表される．彼が打ち出したのは，結果それが「とにかく現代社会が巧妙な制度と権力の構造に巻き込まれていること，かつ人々がそのことに気づかないような構造になっていることを，レトリカルかつ独断的に“論証”しようとするもの」なのである（竹田2004：255）．

社会福祉学をいくら徹底的に追い詰めても，社会を認識するうえでは，社会像を構築する場合においては，どうしてもイデオロギーを解消できないのである．

ここで重要なことは，「社会」を描くときの社会福祉学の条件なのである．まさにどのような原理でもって，人々の生活困難を解決するときの社会の水準を対応させるのかということにかかっているであろう．

（２）概念地図の作成に向けて

ここで社会福祉学の知識の全体を捉えた概念地図を検討したい．この地図は，社会福祉の知識の体系の作成である．これは，いつでも必要な時に引き出せる認識の体系である．

社会福祉の全体像に関わるキーワードは，「社会」概念を踏まえて言うと，「生活」概念である．われわれは，社会福祉学のなかで，生活の知識に言及する全体像を構成しなければならないだろう．

それは，個人が生活のなかで現実的に回復させて，よりよい生活を形成する機能を持つことである．このためには，個人が生活の主体として自己を維持，発達させる営為の持つ「規則性」[10]を明らかにすることが「社会福祉の理論」の知識形成なのである．

本稿では，社会福祉の知識が生活との関連による説明体系を示すだけにとどめるが，基本構想と

しての方向は，次のような過程があるだろう．それは，生活や生活形成の持つ構造と過程の解明が「何をするべきか」という「知識」を導き出すのである（船曳1993：102）．

メタ・クリティークの視点と文脈で強調したように，生活や生活形成の持つ構造と過程の相互関連を定め，それぞれを位置づけなければならない．概念地図の要素として用いるものは，人の生活，人の生活困難，そして，それへの人の対処についての「知識」とするもので，社会資源の知識ではないのである（船曳1993：102）．

それには，個人の生活像を描く知識群が必要である．人の生活は，それを営む主体の積極的な「イメージ像」を作り上げることで成立しているだろう．

それは，生活を営む個人がイメージする生活像である．生活困難とは，社会関係の不調和，欠損，社会制度の欠陥などに介入をし，同時に，他方では，このイメージされる生活像に関する援助内容を持った概念地図を構想している．

その意味では，生活のイメージ像とは，「社会福祉サービス」や「社会資源」と呼ばれているものの「対概念」として存在するのである．それを現実は，社会資源だけを解決するのではなく，生活主体である自己像（イメージ像）を想定するものも同時に解決しなければならないだろう．

この概念地図の構想には，われわれが社会福祉を学問する基本目標は，社会福祉の現実を「よりよく」しようとするところにあり，それは，利用者の状態を「よく」，「正しく」知ることのできる知識を組み立て，それを用いることによってはじめて達成できるものと考えているからである．

8．おわりに

社会福祉学の知識として，「誰もが覚えられる知識，語られる知識，そしてもっと知りたい知識」を構想することが本稿の主題であった．社会資源のような既存の知識ではなく，メタ・クリティークから導いた新しい知識を再構成する試論であった．

社会福祉の知識は，社会資源やサービスではない．それは，人の生活を解明する知識が創造されるところにあるもので，またさらに生活を営む自己像と，それを生きる生活像を支えるものとして，全体としての生活の根拠を理論的に構成しなければならないだろう．

また，それは，生活概念と自己像（イメージ像）と結びついた自分像の一貫性を説明する知識が必要であるだろう．

おわりに，社会福祉学の知識の概念地図の方向性を示してみよう．それは，新しい生活像を作り出すことである．生活概念とは，福祉の対象となる解決すべき知識のキーワードである．

そして，ここでこれまでの議論を集約すると，社会福祉学の知識にとって，アポリアであった客観性の根底である規範科学の根拠となる「価値」（大切なこと）の共有に答えが見いだせるのではないだろうか．

注）

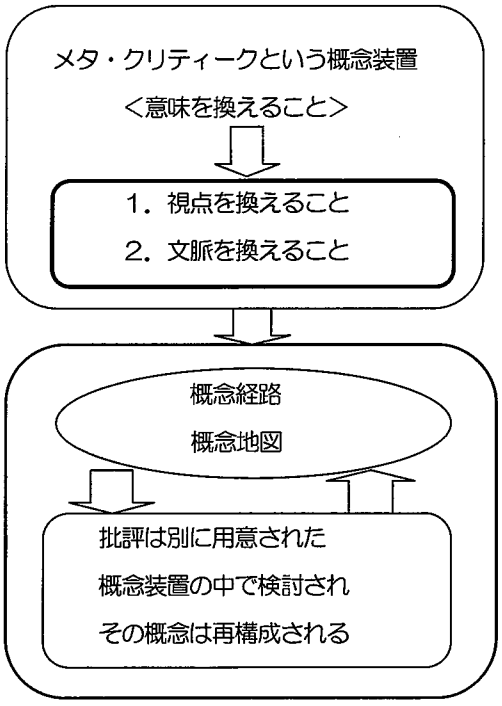
1）M・フーコーの社会福祉学への影響はかなり大きい．例えば，ソーシャルワークでは，この「権力／知」というアイデアがナラティブ・モデルなどの前提となっている．本稿で，あえてイデオロギーとしているのは，ニーチェ流に言うと，これも「解釈」に過ぎないということである．また，今村は，ここで「伝統的な思想史」に言及しているが，本稿では，この思想をあえて「知識」に置き換えて，知と権力の歴史を読み取る場合に，社会と歴史が制度化されることを強調した（今村1993：86-87）．

2）social resources を「社会的資源」とする表記方法もあるが，本稿では，「社会資源」に統一した．また，社会資源の総論を議論するときは，「社会資源論」，個別の内容を表すときは「社会資源」と表記する．

3）メタ・クリティークの概念装置は，拙論

(2012)「社会福祉学と二元論」(高知県立大学社会福祉学部紀要第62巻) で以下の全体図を示した.

「概念装置」の全体図



4) 上記の拙論では,「意味と問うことと, それに答えることによって, 社会福祉の全体像について, 意味不明やミスリーディングを超えて, まったく新しい展望をもたらしたいと考える. とりわけキーワードの意味を探求することによって,社会福祉の本質というよりも, 研究というものの本質が見えてくることである.」と記述したが, 本稿も同じ趣旨である.

5) 拙論では, 原理とぶつかる事態とは, 社会福祉の意味を論究することである. 原理とは, 社会福祉の世界を説明する方法のことである. その意味は, つねに視点と文脈を内包しているキーワードにあるとした (丸岡2012：30).

6) 社会福祉学では, これに限らず「通説」と呼称され, かつ蓄積されたものがあるわけではない. 一般的には, テキストに頻繁に引用されているという程度の意味しかない.

7)「エンパワーメント」が社会資源であることを「関係的資源」として示したのは船曳である (船曳1993：116-117). しかし,「エンパワーメント」が社会資源の活用であるならば, それは, 単に断片的な用語に過ぎなくなるだろう. 船曳は, 批判的にエンパワーメントを「活用」し,「受用」するという文脈が存在しないと指摘している (船曳1993：122).「取得」であると指摘する. そして, それぞれの断片である区分ごとに, 活用が変化していくことに対し, 社会資源の限界を説いている.

8) エンパワーメントとは, 関係的資源という認識ではなく, むしろ「人々が健康とよりよく生きるために必要な資源にアクセスするのを妨げる構造的バリアに焦点をあて, こういったパワーの欠如したクライエントと環境との間のパワー・ベースの変革を意味する」という (久保2000：117).

9) ニーズの充足, 社会正義の促進, 資源のより平等な分配, 環境保護に対する関心, 人種差別・性差別・年齢差別の排除, 自己決定, 自己実現などの要素が, エンパワーメントを志向する実践の基盤になるものだとしている (久保2000：115).

10) 規則性とは, 社会資源論の最終地点が社会資源を創出し, 分配する機能を持った「社会的装置」を概念構成しなければならないということにつながる. すなわち, 社会とは, これらの装置を構成要素とするものでなければならない (船曳1993：124). 言い換えると, このような社会資源論の論理 (方法) は, この装置との関連で現れる人間個人の全体行動の「規則性」, 構造と過程を解明しなければならないという理論装置の条件である.

引用文献

浅田　彰・伊藤俊治・四方田犬彦 (1984)『たのしい知識—反ユートピア』(冬樹社).

中央法規出版編集部 (2002)『新版・社会福祉用

語辞典』214.
福島喜代子（2009）「相談援助の定義と構成要素」新・社会福祉士養成講座『相談援助の基盤と専門職』中央法規出版，第２章第12節．29-41.
船曳宏保（1979）『現代社会福祉学原論』新評論.
船曳宏保（1993）『社会福祉学の構想』新評論.
古川孝順（2001）『社会福祉の運営』有斐閣.
市川一宏（1997）「地域福祉における政策・計画と経営・運営との関係」『新版　地域福祉事典』（中央法規出版）．158-159.
今村仁司（1993）『現代思想の系譜学』ちくま学芸文庫.
岩間伸之（2009）「社会資源開発機能」新・社会福祉士養成講座『相談援助の基盤と専門職』中央法規出版，第11章第５節．232-237.
桂　英史（1996）「知の秩序という普遍主義」『へるめす』1996年９月号．岩波書店．2-13.
丸岡利則（2009）「メタ福祉学の構想」『現代の社会福祉』（日本経済評論社）42-65.
丸岡利則（2010）「社会福祉概念の構造―米国の社会福祉の関する概念整理」（関西福祉大学大学社会福祉学部紀要第14巻第１号）53-60.
丸岡利則（2013）「社会福祉学と二元論―メタ・クリティークという概念装置」（高知県立大学紀要社会福祉学部編第62巻）27-42.
三谷太一郎(2013)『学問は現実にいかに関わるか』東京大学出版会.
盛山和夫(2006)「規範的探求としての理論社会学」富永健一編著『理論社会学の可能性』新曜社.
岡村重夫（1957）「社会福祉における分類概念について（Ⅰ）」大阪市立大学家政学部紀要，社会福祉学篇，第４巻第４号.
岡村重夫・三浦文夫（1972）『老人の福祉と社会保障』（垣内出版）
岡村重夫（1974）『地域福祉論』（光生館）
岡村重夫（1983）『社会福祉原論』（全社協）
小笠原慶彰「社会資源」京極高宣監修『現代福祉学レキシコン』雄山閣.
斎藤兆史（2013）『教養の力』集英社新書.
坂口春彦（1998）「社会福祉分野における『社会資源の整備方法』：その概念と研究の必要性」社会問題研究．47（2）．197-211.
白澤政和（1992）『ケースマネジメントの理論と実際』中央法規出版.
白澤政和（2007）「社会資源の利用と開発」仲村優一他監修『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版．432-435.
杉野明博（2011）「ソーシャルワーク理論の展開」平岡・杉野・所・鎮目『社会福祉学』有斐閣.
高澤武司（2000）『現代福祉システム論』有斐閣.
高橋重宏・山縣文治（2005）「わが国の社会福祉教育，特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する報告書」日本社会福祉士養成校協会.
竹田青嗣（2004）『現象学は〈思考の原理〉である』ちくま新書.
所　道彦（2007）「ソーシャルポリシーとソーシャルアドミニストレーション」仲村優一他監修『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版．330-333.
徳永幸子（1999）「ソーシャルワークにおける社会福祉資源活用の意義」活水論集第45集．93-106.
富永健一（1965）：『社会変動の理論』岩波書店.
友枝敏雄（2009）「現代社会の理解」新・社会福祉士養成講座『社会理論と社会システム』中央法規出版，第２章．42-55.
山本　新「科学主義批判」，下村寅太郎編『科学哲学講座Ⅳ　科学と哲学』（河出書房）1956年，173-193.
Harriett M.Bartlett (1970), The common base of social work practice, NASW. 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』(1978)，ミネルヴァ書房.
Compton, Beulau R. (1980) “Introduction to Social Welfare & Social Work;Function & Process,” Dorsey Press.
Kahn, Alfred J.& Kamerman, Sheila B. (1976) “Social Services in the United States” Phi-

ladelphia;TEMPLE UNIVERSITY PRESS.

Kahn, Alfred J.(1973), Social Policy and Social Services,Random House, Kahn, Alfred J. & Kamerman, Sheila B. (1980) *"Social Services in International Perspective";The Emergence of the Sixth System,* Transaction Books.

Max Siporin (1987) , Resource Development and Service Provision, Encyclopedia of Social Work, Vol.2(18editions), National Association of Social Workers.

Max Siporin (1975) , Introduction to Social Work Practice, Macmillan Publishing Co.

Max Secheler, "Philosophische Weltanschauung", "Munchener Neueste Nachrichten", 5. Mai 1928. マックス・シェーラー『哲学的人間学』樺俊雄他訳（理想社出版部）1931年，129頁.

M・ウェーバー（1936）『社会科学方法論』岩波書店．恒藤恭校閲，富永祐治，立野保男訳.

Roderick M. Chisholm (1966) Theory of Knowledge, Prentice-Hall, Inc. 吉田夏彦（1970）『知識の理論』．培風館.

M・リッチモンド（1991）『ソーシャルケースワークとは何か』中央法規.